

意味論-語用論論争の概観

大川祐矢

京都大学

本発表の目的は、本ワークショップの主題である意味論-語用論論争のこれまでの展開を概観しつつ、意味論と語用論の特徴付けを行い、論争の争点を明確化することである。

意味論-語用論論争は、意味論と語用論のインターフェースを争点とする論争であり、両陣営はここでインターフェースと考えられている「言われていることwhat is said」に対して異なるアプローチの仕方を取る。本発表ではまず、その論争が背景としているGriceの発話解釈の枠組みについて説明する。Griceの枠組みでは、「言われていること」は文が持つ意味から純粋に意味論的なプロセスによって決定され、それがさらに語用論的なプロセスのインプットとなる真理条件的内容と一致するとされる。しかし後の研究で、「言われていること」にこうした二重の役割を背負わせるGriceの枠組みでは説明できないような例が知られるようになった。代表的な事例は所有格に関する問題で、例えば「ジョンの本は机の上にある」という文において「ジョンの本」は具体的なコンテキストが与えられないと意味が定まらないため、この文が表す命題は真理条件を欠いているというものである。

こうした問題に対して、Griceの枠組みを修正しつつも意味論独自の領域を確保しようとする立場が意味論擁護派であり、代表的な論者は「折衷的ミニマリズム」を提案するBachである。これに対抗する立場として、語用論が果たす役割をより広いものとし、意味論の役割をほとんどなくしてしまうか、あくまで付加的なものとする立場が意味論排斥派である。この立場の代表的な論者はRecanatiである。本発表では両者の議論を提示することにより、論争の全体像を描出することを試みる